（添付資料１）

最優秀賞・文部科学大臣賞

忘れられないあの日の挑戦
青森県十和田市立四和中学校
３年　白川　颯人

　僕は中学２年生。10 月初めの陸上競技場にいる。この４時間後、こんなに笑顔になるとは自分自身、想像していなかった。
　今日は中体連陸上競技、新人戦の県大会。いつも以上に緊張している中、アップをする。でも、調子はいい。今回は上の大会にいくためではない。175㎝を跳んで１位になるために来た。勝つために攻める。そう何度も自分に言い聞かせた。
　この、走高跳という競技に出会ったのは、中学１年の夏休み。それまでは走「幅」跳をしていたが、顧問の先生に高跳の方をやらないかと言われたことがきっかけだった。
　しかし、初めは乗り気ではなかった。僕は自分としては幅跳で勝負すると決めていたから。それに、背中から着地をするというのが普通に怖かった。
　実際、取り組んでみると、走高跳の魅力にどんどんはまっていった。この競技は、ただ跳躍力があるだけではだめで、助走からマットに降りるまですべてがかみ合わないとクリアできない。それが面白いところであり、とても難しいところでもある。また、観戦者の目線からでもクリアしたかどうかがはっきり判断できる、という分かりやすさがいいと僕は思う。
　毎日のように、それぞれの動作が一体になるように、の繰り返し。
　まずは助走。ここが一番緊張する。自分が決めたマークの位置からスタートする。大事なのはうまくいったときを「いつも通り」にすること。ラスト５歩の駆け上がりでスピードを上げて踏切に入る。ここが崩れるとそのあとがすべてバラバラになってしまう。
　次に踏切。助走のスピードと下げた重心をすべて上昇力に変換する必要がある。足先から頭までを使って全力でブレーキをかける。そして踏切と逆の足、上半身を最大限に使って体を引き上げていく。この瞬間に自分の中で、「落としたな。」とか「跳べたな。」とかが分かる。
　空中では上昇する力に身をゆだねてバーを越えていく。ここでは足の返しを強く意識しなければならない。体がバーを越えていても意識が薄いと体が落ちていく過程でバーが足に当たって落ちてしまう。ここが決まると本当のクリア。

ほんの少しでも当たってしまうとすべてが終わる。最後の最後まで気を抜けない。

さて、今日はどうなるだろう。

いざ、競技開始。150㎝までパスをして、155㎝からのスタート。緊張しながらも160㎝までは一発でクリア。

しかし165㎝１回目、失敗。要注意人物は成功。焦る気持ちを抑え、すぐに２回目の跳躍。先ほどの反省を生かして助走のスタート位置を下げる。冷静な対応ができた。そして何とか２回目でクリア。

いよいよ勝負の高さ。残る競技者は自分ともう一人だけ。

「ここは一発で決める。」

心に決めて助走に入る。跳ぶ瞬間に、

「近い。」

そう感じるも、行くしかない。どんな形でもいいからクリアしなければ。

覚悟を決めて全力で踏み込む。バーには触れなかった。

白い旗が上がる。ガッツポーズ。

次に、ライバルの挑戦が始まった。相手が１回目、２回目と失敗する。そして最終跳躍。

決着がついた。会場内に「カンッ」という落ちたバーの乾いた音が響き渡った。

しかしまだ自分の目標は達成していない。175㎝。心を落ち着かせ、助走のスタートに入る。またもや「近い。」先ほどのようにはいかず、ギリギリでバーを落としてしまう。

そこで僕は、ここまでずっと使わずにいたある作戦を実行することにした。

それは「手拍子。」観客の皆さんに手拍子を求めるのだ。僕の手拍子に応えるように、少しずつ少しずつ、その音が大きくなっていき、競技場を包み込んだ。会場の一体感に心が震える。それは巨大な力となって僕の背中を押した。

絶対に、いける。

そう確信した途端、冷静さを取り戻した。落ち着いて、ゆっくりとスタート位置を下げる。

助走開始。踏切、上半身での引き上げ、最高点での姿勢、そして足の抜き。

すべてがかみ合った――今までにないほどに。かなり高さが出た。

見上げると、１ミリも揺れていないバーがそこにあった。その向こうには、雲一つない快晴の空が広がっていた。

笑みがこぼれる。目標達成。

この時、初めて感じた。全中（全国中学校体育大会）に出場したい、と。